『椿説弓張月』の真鶴像

岡田紀子

序

曲亭馬琴は多くの読本を残しているが、その読本の魅力の一つに登場人物の面白さが挙げられる。これはあくまでも登場人物の性格をいっているわけではなく、人物相互の関係や人物がもつ過去などの人物設定を指してのことである。

馬琴が描く人物像はよく批判されているように勧善懲悪そのもので、善の方の人物は仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌をわきまえた完全な善人であり、悪の方の人物は徹底した悪人である。その点は坪内逍遙が『小説神髄』で述べているように現実的でなく、面白みに欠ける登場人物だといえよう。だがその人物の設定は善人であれ、悪人であれ、また主要人物であれ、脇役であれ非常に詳細で、興味深いものが多い。

この『椿説弓張月』にも主人公の為朝をはじめ白縫や紀平治、阿公など百人以上もの人物が登場するが、その中でも特に気になったのが真鶴という女性である。

真鶴は『弓張月』の後半、すなわち琉球編で始めて登場する脇役の一人であるが、その設定の細かさは為朝の妻三人をもしのぐ程である。また「真鶴」という名前にしても何か意味ありげで、話の前半に多く登場した鶴との関連性を感じさせるように思った。そこで私は、何故真鶴にこのような設定が与えられたのかを考え、さらにその真鶴の人物像について論をすすめていきたいと思う。

なお、本文中の『椿説弓張月』原文引用その他は全て『日本古典文学大系』（岩波書店）中のものをテキストとした。但し、読み仮名は適宜省略する。

第一章　真鶴の存在について

第一節　典拠との比較

真鶴という女性は根本的には典拠に基づいて創作された登場人物の一人である。だがその占める位置はあまりに大きく、果たす役割も非常に多い。そこで私は真鶴を典拠に沿って創作された部分、八代と似た働きをする部分、真鶴でありながら真鶴ではない千歳の部分の三つの要素に分けて考えていくことにした。この章では典拠と真鶴の比較、八代と真鶴の比較を通して真鶴の存在の大きさについて考えてみたい。

まず真鶴と典拠の比較だが、真鶴自体の典拠は地誌『中山伝信録』(注1)巻四に求められる。これが馬琴の設定した真鶴像の基礎で、その内容より真鶴は作品全体を通して健気で勇気ある女性として描かれることになる。

この部分に概当する彼女が生贄になる話は『椿説弓張月』の中では第三十三回から三十五回にわたって書かれているが、典拠との間にはいくつかの違いを見出すことができる。(表1参照)

まず典拠ではこれは義本王の時の出来事であるが、馬琴はこれを琉球国天孫氏二十五世尚寧王の時代に設定した。これは舜天王が為朝の息子であるという説に従うためであり、馬琴自身も「この編の列傳、おの〳〵彼書に載たる人物を抜萃して、私に名を設けず」「しかれども、事はこゝに説ところに似て、時代あはざるものあり」と述べている。

その他にも生贄を捧げる理由、真鶴が生贄として名乗りでてきた理由に差異が見出せる。これは真鶴を親孝行であるのはもちろん、主君に対する礼儀をわきまえ、忠誠心厚い人物に描こうとしてのことであろう。

加えて真鶴の両親についてや、彼女の外見についての詳しい記述があるのも『弓張月』だけであるし、また生贄になろうと名乗りでたその後にも違いが見られる。

以上見てくると馬琴が『中山伝信録』という典拠を元にして、あるところでは真鶴の悲劇性を強調するため、あるところでは舜天王が為朝の息子であるという設定に合わせるため、またあるところでは後の展開を考えて描写を詳細にしたり、時代をずらしたり、他の典拠を取り入れたりしてこの部分の物語を構成していることがわかる。そしてそうすることによって、真鶴は典拠の中の一人物から『椿説弓張月』の中の登場人物の一人へと生まれ変わるのである。

第二節　八代との比較

『椿説弓張月』は前半（日本編・第一回〜三十回）と後半（琉球編・第三十一回〜六十八回）とが各々独立した感じを与える読本である。この前・後半のつながりについて石川秀巳氏は、為朝の一生の中で最大の山場であるはずの保元の乱があまりに小さく扱われていることと、保元の乱

と琉球の王位争奪戦の類似性に着目して「保元の乱の構図が琉球争乱の中に言わば擬似保元の乱として再現され、相似た二つの争乱が対比的構造をなして為朝一代記の構想によって貫かれ」[注2]ているという新しい見解をうちだした。この石川氏の論に従い私はそれを八町礫紀平治と陶松寿、八代と真鶴にあてはめて考えてみた。なお該当する場面は第九回と第四十回・四十一回のそれぞれの女主人（白縫・寧王女）が襲われるところである。

まず紀平治と松寿を比較する。二人の最大の共通点はこの場においてそれぞれ自分の妻を失うことである。このことはテキスト中の後藤丹治氏の注に「松寿が妻の屍を見て悲嘆する趣向は第九回で紀平治が妻の八代の討死にした姿を見て嘆く所と似ている」とあることからも明らかだが、他にもこの争いの前の期間主君のために妻とは別れて暮らしていたこと、妻の臨終に間に合わなかったことなどが二人の共通点として挙げられる。

それから正妻の他にもうひとり妻である人物が登場するのも同じである。しかし紀平治の場合が八代と結婚するよりも前のことで、相手は阿公という八代とは何の関連もない別人であるのに対して、松寿の方は真鶴と死に別れて以後のことで、相手が千歳（真鶴の亡霊）であるという違いがある。加えてこの阿公は悪人、千歳は善人であり阿公と千歳にはまるで共通点は見うけられない。

最後に全体を通して比較してみると、松寿よりも主人公為朝の第一の家来であり、かつ日本編と琉球編をつなぐ役割をも担う紀平治の方が断然扱いは重く、二人が類似しているのは八代・真鶴に関連が深いこの場面だけであることがわかる。従って、馬琴はやはりこの二つの場面を対比的に構成したのだと考えられ、よって八代と真鶴では八代の方が重く扱われている方が自然であろう。ところが八代と真鶴とを実際に比較してみるとそうはなっていないのだ。

真鶴と八代との間には重要な共通点が二つ見出せる。その一つは夫が主君の最も信頼する忠臣であること、そしてもう一つは女主人に仕え、命をかけてその主人を守ろうとするが力つきて死んでしまう、というその人生である。このことをふまえて、二人の死の場面を中心にもう少し細かく比較を進めていきたい。（表2参照）

まず、二人に共通するのは主人への忠誠心が厚く、夫への愛情が深いという点である。そのため二人とも主人に深く信頼されて、その側近くに仕えており、それゆえいきなりの敵襲に親とともに死のうとする主人を諫めて止める役割も果たすことになる。

また主人のために追手の人間を殺すだけの武力と勇気をもっていることも二人に共通しており、そのうえこの戦い

ぶりの描写は非常によく似ている。

一方二人の死の場面には少し差異が認められる。真鶴の死の場面は八代よりもずっと悲劇的で、むしろ野風の死の場面に類似しているようだ。(注3)

他に異なるのは必死に守ろうとした主人、白縫が八代の方はぎりぎりのところで紀平治によって助けられたのに、真鶴の方は王女が死んでから白縫の亡霊に助けられたことくらいであるが、これは後に舜天丸を無理なく琉球の国王につけるための馬琴の考えであろう。

以上のように八代と真鶴はこの場面では非常によく似た役割を与えられている。しかし同じ脇役であっても前にも述べたように八代は主人公為朝の第一の忠臣八町礫紀平治の妻であり、真鶴は琉球編でのみ活躍する陶松寿の妻であるから八代の方が重く扱われてもよさそうなものだが、実際の作中では全くその逆である。

すなわち八代が第九回で討ち死にしたあとはその名前すらもほとんど登場しないのに対して、真鶴には悲劇的に死に別れた両親や、廉夫人の妹であるという高い身分があり、そして亡霊の千歳として蘇るという設定まで与えられている。その上、最終的には琉球国の玉璽の一つとなる剣にその名前が残るのである。

しかも真鶴にしても千歳にしてもその境遇はあまりにも悲劇的で、その点ではヒロインである白縫や寧王女、簓江、長女にも勝っている。ではなぜ馬琴は同じような脇役の八代にではなく、真鶴にこれほどの設定を与えたのであろうか。

第三節　真鶴が作中に占める位置

真鶴はその登場の仕方からしてずいぶん印象的である。寧王女の身代わりの生贄として名乗り出て来た時、真鶴は十五才でその容貌については「賤女ながら容止は、磨かで清き玉ぞ巻く芭蕉布の単衣を、裾短に引折て、麻衣の帯結びさげ、脊に負たる藁裏の軽き打扮も愛敬づきて、年は三五の月の眉、含る花を見るがごとし」とある。ここからは飾らない可愛らしい少女の姿が伺えるが、この少女はこの時点ですでに両親を亡くしており、それを微塵も感じさせていないという点でかなり強い少女であるとも言えそうだ。しかも親孝行で忠誠心厚いのであるから、真鶴は馬琴の理想的な少女像である。その真鶴が琉球編で単なる脇役とは思えない程に多く登場するのは一体何故なのだろうか。いくつか例を挙げながら、真鶴の作中に占める役割を探っていきたい。

まず、挿絵の効果もあいまって印象的なのが阿公が彼女の髪を掴んで荒々しく轎からひきずりだす場面や、陶松寿

が彼女の首を王女の身代わりにする場面である。このような場面では読者は真鶴に深く同情し、彼女の存在を深く心に刻みこむであろう。

それから、陶松寿との結婚が王女を守ろうとするものであったため一緒にいられたのは一夜限りであとは離れ離れ、という前半の為朝との縁が薄かった女護島の長女をもしのぐ設定も彼女の女性としての不幸な印象を強めている。

何より最も真鶴への同情を強めるのは、彼女の魂が千歳としてよみがえり、夫とささやかな幸せな暮らしをしながら王女への忠義を尽くそうとしていたのを、為朝主従から疑われて夫から斬られてしまう場面である。

以上のように真鶴にはかなり悲劇的な要素が強いが、それに千歳の亡きがらが卒塔婆であったことや、土の中から子供を生みおとすことなどの怪奇的な要素が加えられ、全体としてかなり複雑で強烈な印象を与える人物となっている。そのうえ、それらの場面はどれもストーリーの要所であるから真鶴の作中に占める位置は非常に大きいといえるであろう。(注4)

中でも、阿公が真鶴を海につきおとそうとしたのを毛國鼎が理路整然とかばい、阿公自身にその過ちをみとめさせたがゆえに尚寧王が蛟塚に興味をもち、その結果朦雲を目覚めさせ、ひいては琉球争乱につながることなどはその最たるものと言えよう。

さらにこれに類するものとして、朦雲を倒した武器のひとつが真鶴の剣と名を変えられた鵜の丸の剣である、という因縁も後（第六十一回）にでてくる。この『弓張月』を貫くものが為朝の崇徳院への忠誠である以上、鵜の丸の剣が真鶴の剣と名を変える必要性はないと思われるのに、馬琴がわざわざ千歳の件を設定してまでそうしたのには何か理由があったのではないだろうか。私はそれが真鶴の典拠と琉球神話との関連に求められるのではないかと考えた。

元々の琉球神話には、馬琴自身が『琉球国事略』『琉球談』『中山伝信録』などを参考にして第三十三回で書いているように琉球の建国者である天孫氏について国王の始祖であること以外には何も語られていない。そこで馬琴は天孫氏に国家創成のための重要な行為をさせた。それが馬琴の創作した琉球神話である。これは「往古太平山の前の海に一ツの虬ありて、常に風雨を起し洪波を致し、五穀を損ひ洲民を害する事多かりければ、先王ふかく愁ひて天地に祈禱し、みずから潮に浸りて彼虬を殺し、是を瓶架山の東壑に埋給ふ。今の舊蛟山是なり」というもので、この蛟の骨を埋めた所に石を建て松を植えて標とした古迹が蛟塚であり、この蛟塚からあらわれたのが後半の最大の敵役、朦雲なのである。

この馬琴によって創作された琉球神話の元になったものについて、石川氏は『和漢三才図会』の「地界万濤蜿蜿若蛟水中」が琉球と蛟とを結びつける発想の核となったのであろう、と推測し、さらに「「超自然」が「比喩的な意味が文字通りにとられることから生じる」ように、「虬の水中に浮かむが如し」という比喩から、まさに蛟がかつて棲息していた島、あるいはその虬を退治することによって成立しえた国というふうに発想されているのである」[注5]と述べている。

しかし、この核となる部分には真鶴の典拠も加えられるのではないだろうか。真鶴の典拠については第一節でも触れたが、比較してみると蛟が暴風雨をおこして民を害したことや、これを倒すのに天の力を借りたことなどの共通点も見出せるし、また蛟がいたのが海であったことも作中の真鶴が典拠では谷であったのに、海に投げこまれかける場面との関連性を感じさせる。そして何より、朦雲（巨蛟）を倒したのが真鶴の剣であったことがその証だと考えられるのである。

ところで石川氏は「『弓張月』は、物語の基底に据えた建国神話を蛟＝朦雲の存在として実体化し、そこに琉球の根源的な闘争を語ろうとするので」あり、「琉球編の基本構想は、虬の霊に対する人間の戦いに集約されるのである」[注6]と述べている。この蛟の設定に関わっているからこそ、真鶴は琉球編においてこんなにも多く登場し、読者に強く印象づけられるよう設定されたのではないだろうか。

第二章　御伽草子との関連

第一節　鶴が作中に占める位置

さて、ここで物語前半に多く登場した鶴に目を向けてみたい。

この鶴は第三回で初めて登場して為朝に命を助けられ、次の第四回でもう姿を消すが、第六回の琉球において、第十四回の大島においてと何度も為朝の前に姿をあらわす。その登場の仕方には三通りあり、一つ目は鶴自身が為朝を導くために人間の姿を借りて現れるもの、二つ目は福禄寿仙の使いとして、というもの、三つ目はこの鶴なのかどうかがはっきりしないものとなっている。

一つ目の鶴自身が為朝を導くのは一度きりで、この時だけは福禄寿仙はまるで関係してこない。第四回で為朝に正妻・白縫をめあわせるのがそうだ。鶴は「白綾の袿に、おなじいろの袴着て、紅なる一枝の花を頭挿たる」女性の姿で為朝の夢の中にあらわれ、為朝を肥後の阿蘇へと導き、また後の琉球での再会を予言している。そして為朝はこの

鶴を神に通じたものとみなしてその予言の通りに行動し、結果として、この予言は前半の山場の保元の乱、および後半の琉球へのつながりとなる。

二つ目の使いの役を果たすのは第六回の琉球での再会と第十四回の大島での再会の場面である。これが福禄寿仙の使いであったことは第六十七回に福禄寿仙自らが述べている。特に大島での再会は、第五十七回で「鶴の君しらず羽」に似た短冊にうつされていた和歌を為朝が（漢詩の返歌として）詠む場面であり、鶴が物語の前、後半をつなぐ役目を果たしていることの証明でもある。

三つ目は、舜天丸誕生の時に丹頂鶴が家の棟にとまって三声鳴いて南の方へ飛び去ったこと（第二十八回）、舜天丸と紀平治が姑巴島において黄金の牌と白い鳥の羽五、六枚を見つけ、この羽を用いて矢を作ること（第三十二回）、またその矢が朦雲を倒したこと、その時鶴の鳴き声が聞こえたこと（第六十五回）などである。

この三つの中で最も重要なのが、女性の姿で為朝を導くところであるのは言うまでもないが、この助けられた鶴が女性の姿となって恩返しをするという構成は有名な民話「鶴女房」を連想させる。そこで動物報恩譚という面から鶴を見つめ直してみたい。

「鶴女房」という民話は、日本全国に分布している動物報恩を伴う異類婚姻譚である。しかし『弓張月』の中では鶴を助ける男が主人公の為朝であり、その正妻には相応の身分をもった女性をあてる必要があったためか異類婚姻譚の部分はあらわれず、動物報恩譚の性格だけがあらわれている。

この「鶴女房」と為朝が鶴を助ける場面とを比較すると、まず命を助けられた鶴が女性の姿で男の前にあらわれ恩返しをし、鶴の姿で男の前から姿を消すという構成が共通していることに気が付く。

一方この場面での相違点は「鶴女房」では女が実際に男の前にあらわれるのに対して、『弓張月』では女は為朝の夢の中に登場するという点である。これは前にも述べた通り、為朝の妻を異類の者にしたくなかったためであると考えられ、これによって機織りの部分も正体を見られて姿を消すという部分も削除される。そしてさらに恩返しの仕方にも微妙な変化を与えることとなる。「鶴女房」では女自身が妻となって家を栄えさせるが、作中では鶴は「艶にして且賢き妻（白縫）」と「よろしき後楯（白縫の父親）」を得させることによって為朝を幸福にしているのだ。

以上見ていくと馬琴が自らの作品の中にさりげなく「鶴女房」の骨組みを取り入れていることがわかる。では次に「鶴女房」を骨子に成立した御伽草子『鶴の草子』と千歳

との関わりについて考えていきたい。

第二節　『鶴の草子』について

千歳について原文を見ていくと、千歳の比喩に鶴が数回用いられているのに気づく。そこで千歳と前半登場した鶴との間に何か関連性がないか考えてみたところ、私はその背景に御伽草子の『鶴の草子』があるのではないか、と推測した。この節ではまず『鶴の草子』が『弓張月』中に利用されている箇所について述べておきたい。

『鶴の草子』の本文には流布本『鶴の草子』と別本『鶴の草子』の二系統がある。この流布本と別本とを比較すると、内容はほぼ同じであるが別本の方には流布本にはない「わざわひ」を連れて来る、という難題型の要素がつけ加えられており、別本を潤色したものが流布本であると考えられる。そこで馬琴が流布本も別本も見る可能性があった[注7]ことから、ここではこの二つの草子をひとまとめにして『鶴の草子』とみなすことにした。このような『鶴の草子』が影響していると考えられる部分が『弓張月』中にはいくつか見出せる。

その例としてまず挙げられるのが「異郷」の存在である。『鶴の草子』では異郷は女房の里として描かれており、流布本では宰相がこの異郷で不老不死の酒を口にしている。

これにあたるのが『弓張月』中に登場する姑巴島である。姑巴島はいわゆる仙境で、この島で舜天丸は福禄寿仙の力によって息をふきかえす。そして共に漂着した紀平治と二人で仙果の桃だけを食べて仙童に成長し、やがてそこに為朝や王女が訪れて、朦雲を倒す力を養うことになる。異郷を訪れて幸福になるというモチーフは「浦島太郎」をはじめとする他の昔話にもよく見られるが、ここでもそれが取り入れられており、さらにこの異郷の桃が先に述べた不老不死の酒に該当すると思われる。しかしこの『鶴の草子』の異郷が「くうでんらうかくは、いらかをならべ。しつほうしやうごんの、まきはしら。きんきんのかわらを、しきならべ。」た華やかな都として描かれているのに対して、『弓張月』の異郷は陶淵明の「桃花源記」を意識した仙境として描かれているのが対照的である。

次に挙げられるのが「わざわひ」という獣の存在である。これについてはテキストの補注に「別本鶴の草子にも同一系統の禍獣のことが見えている」とあることからも明らかであろう。ただし、『鶴の草子』ではこの獣を連れてきたのは主人公の男で、地頭の息子の難題に応え、この息子をこらしめるためであったのに対し、『弓張月』では尚寧王の要請に応えて朦雲がこの獣を出し、それを悪用している。つまりこの獣の利用の仕方がちょうど逆になっているので

ある。

それから流布本の方にしか描かれていないが、攻め寄せてきた宮崎の軍勢を追い払うために女房が異形異類のものを呼び寄せ戦う「（女房が）じんじやうにいでたち。みなくれないの、あふぎをもち。ひろゐんに、たちいで。こくうを、まねき給へば。（中略）あらふしぎや。にはかに、やまかぜ、はげしくふき。くろくも一むら、たなびきて、やかたのうへに、たちおほひけるが。くものうちに、いるい、ゐぎやうの、ものこそ、見えたりけれ」という件によく似た場面も『弓張月』中に見出せる。「朦雲騒ぐ氣色もなく、空中を指招けば、一朶の烏雲まひ降り、雲の中に一軍の、異形の人馬立顕れ」という第五十六回の朦雲が術を用いて異形の軍勢を出現させる所である。しかしこれも禍獣と同様に利用の仕方の善悪が逆になっている。

また千歳に関わる例として、流布本『鶴の草子』では鶴と男とが結婚した後に鶴が人間に転生して子供をなすのに対して、『弓張月』では真鶴が死んだ後に、亡霊としてあらわれた千歳が松寿との子供を生む、という順序が逆ではあるが似ている点も挙げられる。

以上見てきて、馬琴が『鶴の草子』のエッセンスのいくつかを他の典拠と合わせたり、利用の仕方を変えたり、と少しひねった形で作中にとり入れていることがわかると思う。では次に話の構成上の共通点を通して、千歳が作中に占める位置を考えてみたい。

第三節　真鶴と鶴の背景

千歳は真鶴の亡霊でありながら、その姿は真鶴とは別人として「年紀は三十あまりにして、山ふところにはいと似げなき、顔色八九分の趣あれど、天目一の命の炊妾にや、偏目盲たる賤婦が、芭蕉布織てゐたりけり（中略）霧の中なる花かとおぼしく、昔をしのぶ面影は、由緒あるものゝ零落て葎の宿に世をや避けん」と描かれている。この何か理由のありそうな怪しげな雰囲気が真鶴にはない千歳の特徴である。

また自分の家に為朝主従を迎えての彼女の行動も為朝の刀に目をとめたり、わざと「一人田土夫婦」と書いた板を落としたり、と疑念を生じさせるようなものばかりで、自然と読者がこの新しい登場人物に興味を抱くように設定されている。さらに、依田学海氏が「かの海棠を朦雲の幻術にして利勇を惑はす未生の人物としたるは工に過ぎて反てよからす」[注8]と批判した海棠の件にしても、為朝が千歳を疑う理由の一つにするために設定したのは明らかである。ここまでして馬琴はなぜこの千歳という人物を生み出し、さらに詳細な設定を与えたのであろうか。

その理由をいくつか考えてみると、そのひとつは馬琴が作中で寧王女に「妻とはなりぬれど、只一チ日もひとつに住ず、その身國難に死したれば、さそな遺憾からめ。されば、にや年を經て、その霊は窄都婆に憑て、更に良人に斉眉たる」と語らせているように真鶴を陶松寿と暮らさせてやるためであったと思われる。

それから楊文鳳の「吊夫婦墓」[注9]という詩の内容を『弓張月』により生かすためでもあっただろうし、さらに第二章でも述べたように鵜の丸の名を真鶴の剣と変えさせるための手段でもあったとも考えられる。しかしこれ程詳しく描写し、設定しているからにはそれだけではないように思えるのだ。

『鶴の草子』の基本的な骨組みは〔善良な男が鶴を助ける〕→〔女があらわれ自然に男の妻となる〕→〔幸せな日々〕→〔外来者による別れのきっかけ〕→〔子供が生まれる〕である。この男が幸せになるまでの部分がいわゆる動物報恩で、鶴が男の女房になる部分が異類婚姻、そしてこの次に別れがくるのは人間と異類との婚姻は必ず絶たれる約束になっていたためだ。

これはほぼ陶松寿と千歳の件にあてはまる。すなわち、松寿が廉夫人と真鶴のために卒塔婆を建てた帰りに偶然千歳に出会い、「いつとなく妻と呼び、良人と呼ばれ」る間柄となって幸せに暮らしていたところへ為朝主従があらわれて千歳に疑いをいだき、松寿に妻を殺させるきっかけを作る。そして争乱がおさまった後に真鶴の卒塔婆塚より二人の子供が生まれ出てくるのである。

また細かい部分でも、例えば男の住んでいた家と、松寿・千歳が暮らしていた家の様子や、男と女が一緒に暮らし始めた後に自然と夫婦になること等の共通点が見出せる。

そしてこれに日本編の鶴が助けられるという要素を組み込むと、ちょうど構成が『鶴の草子』と重なるのである。

だからこそ馬琴も千歳に謎めいた印象を与えた上に、初登場の場面で彼女に「鶴女房」を意識した機織りをさせていたり、千歳という名について松寿の口から「鶴の齢を象りて」と言わせたり、寧王女に「（亡霊の千歳が土の中で子供を出産したことについて）「鶴は五百年にして遊牝せず、雌雄相見て孕む」といふなる。これも只氣を感じて孕めり」と語らせたりして、鶴の比喩を多用したのではないだろうか。

麻生磯次氏は、馬琴の読本の特色でもある複雑で、ややもすれば不自然になりがちな人間関係や事件はどれも偶然のような印象を読者に与えるが、実は仏教でいうところの「因縁」のためにそういう結果が生じているのである、[注10]と述べている。そうすると、鶴と千歳の間に『鶴の草子』お

よび「鶴女房」を意識した根底でのつながりがあったというのも考えられなくはないだろう。

さらに千歳は真鶴の亡霊なのだから、琉球編における真鶴の重要性を併せて考えると、一見単なる脇役としか見えない真鶴には予想以上に大きな役目があったのだ、と考えられる。

結び

以上、真鶴について考察を進めてきたが、彼女が典拠と八代と千歳という異なる三つの要素から成る人物であることが確認できたと思う。

まずその三つの要素のうちの「典拠」、すなわち『中山伝信録』にみえる真鶴の描写について言えば、これが真鶴が生贄にされかける場面の典拠であると同時に『椿説弓張月』琉球編の構想の典拠でもあったことは第一章第三節で述べたように明らかであろう。そして、そのために真鶴の琉球編に占める位置は自然と大きくなったのだと考えられる。

また、真鶴の脇役にしては不自然な存在の大きさについては、日本編にのみ登場した「八代」と比較することによってより明確になった。さらにこの比較を通して得られた二人の相似性は逆説的ではあるけれど、『弓張月』中の二つの大きな争乱が対比的に描かれていることのあらわれでもある。

最後に「千歳」についてだが、千歳と鶴とが『鶴の草子』を媒介にして結びつくことによって、各々独立した物語のようにも見える『弓張月』の前、後半が確実につながっていることを明らかにした。

このような三通りの方法で、一見脇役にしか見えない真鶴が、実は『椿説弓張月』という作品の構想の一部を担う程の存在であったのだ、と言えそうである。

注

注1　中国の地理書で六巻からなる。清の除葆光撰。一七二一年成立。琉球国の王府の事情や中国との外交関係、王系、地理、制度、風俗、言語などが記されている。

注2　「琉球争乱の構図（上）――『椿説弓張月』試論――」　石川秀巳　山形女子短期大学紀要一五　昭和五八・三

注3　真鶴の死の場面は野風の死の場面に、千歳の死の場面は山雄の死の場面に各々類似している。

注4　他の例としては、千歳の件が朦雲を倒す剣を真鶴の剣と改名させる理由づけとなっていること（第六一回）や、真鶴（千歳）が土中から生んだ子供が舜天丸を守る為に死んだ高間太郎と磯萩の生まれかわりであった

こと（第六六回）、さらにその女の子がいずれ舜天丸の后となること（第六八回）などが挙げられる。

注5　「琉球争乱の構図（下）――『椿説弓張月』試論――」　石川秀巳　山形女子短期大学紀要一七　昭和六〇・三

注6　注2に同じ。

注7　テキスト（下）の補注五一「禍獣」の項に別本『鶴の草子』についてふれてあり「御伽草子は馬琴によって採用される可能性がある」と後藤丹治氏が述べている。

注8　「椿説弓張月細評」　依田学海　出版月評一一～一四　明治二一・六～九　日本文学研究資料叢書『馬琴』収録

注9　テキスト（下）の注に「楊文鳳の夫婦墓の史実は今詳かでないが、馬琴はその夫婦墓の名を借りて、弓張月の夫婦墳の話を創作した」とある。

注10　「馬琴の読本と因果観」　麻生磯次　「国語と国文学」三二―四　昭和三〇・四

参考文献

『室町時代物語大成』第九巻　横山重他編　昭和五八・二・二八発行　角川書店

典拠との比較（表1）

・『中山伝信録』（巻四「北谷」の条）	・『椿説弓張月』（第三三～三五回）
無漏渓あり。	北谷なる、海邊
義本王、宋の淳祐中に当る。	尚寧王
渓中悪蛟暴風雨と患を為す。	是年山の神、いたく荒れ瞋りて、海山の掙了、その便きをうしなひ、樵夫漁翁等、いたくうち歎く
童女を慕って犠と為し之を祭る。	中婦君ふかく歎び、竊に利勇と示あはして、腹心のものを、処々の間切に遣し、「國王、忠臣の諫を聴給はで、寧王女を中城へ移し、世子に立給ふゆゑに、君真物のあら神怒りて、この禍を降し給ふ」とぞいはせける。されば一犬形を吠て、群犬声に吠るならひなれば、この風声囂囂として巷に満てり。（中略）阿公は、豫て利勇が伎倆に与し、君真物の祟りなり、と偽りて、海山をあらするは、彼が所為なれば、はやくそのこゝろを得、夥の弟子託女を將て、草圓を戴き、浄衣をうち被て、出迎へつゝ、仰をうけ給はりしばしうち按ずるおもゝちにて、いらへまうすやう、「かしこけれど、大王既に神と人とのこゝろにたがはし給ふから、天この災を降し給へり。今これを禳除んには、辰の年月日時に生れたる、女子を犠として、この海に投め、大王みづから懺悔して、水

宜野湾の章氏の女真鶴募めに応じて身を捨て母を養う。

伯を祭慰め給はば、神の鎮り給ふ事もありなん。もししかし給はずは、國中荒廃れて、忌〻しき大事に及ぶべし」といらへけり。

「……彼は宜野湾の山里に、いと窶しくて母を養ひ、芭蕉布を織て生活となすものなるが、恐けれど、王女と同庚にして、しかも三月、辰の日辰の時に生れしとぞ。……」

「……今度大王より、辰の年月日時に生れし女子あらば、犠に進らせよと國中に令しらして、普く募給へども、参るものなかりしかは、王女みづからおん躬を捨て、犠になり給ふ、と風声す。わが母これを聞て、大に驚き、真鶴にいへりけるは、「（中略）母子忠義に命を隕して多〻の汚名を雪むべきはこの時なり。……」

孝天神を感ぜしめ、蛟を滅し、害を除く

毛國鼎眼を聴らし、「阿公、君を惑して婦女子を犠とす。もし其験を得ざるときは、罪なき人を殺し給ふ、君王の御悞となるべし。小臣これを思ふが故に、水神をこゝへ迎て、犠を受るや、受ざるやを試んとす。是を禁るものは忠臣にあらずわれ何の罪あって、縛を受べきや。」と呼る。（中略）軈て真鶴を扶掖て、壇の辺に参り、さて國王にまうすやう、「阿公が奸計、既に發顕たり。今より人をもて犠とし給ふ事は、思ひとゞまり給へ。……」

尚寧王点頭て、「今日の事、もし毛國鼎なかりせば、忠孝比なき少女を殺すのみならず、大に徳を損ひて、民の望みを失ふべし。（中略）綷の叙に、われみづから彼山に　登りて、件の塚を發せはや、と思ふなり。」

「……真鶴は、命婦たり。彼をば中城に將てかへりて、寧王女に給事させよ。……」

王大いに喜び、以て王子に配す。

八代と真鶴の比較（表2）

・八代（第九回）

「わらはが夫紀平治も、洛にて討死し侍りつらんと思へば、たえて存命べきこゝろなしといへども、なほかくて侍るなるは、夫の忠義を思ひくみ君の先途を見とどけまゐらすべう思へば也。さは八代が胸くるしさをもしらせ給ひ、一旦大殿の御こゝろを安めて、なほ迯れがたくはその時に、ともかくもならせ給へかし。」としば〳〵諫てわりなく馬に抱き乗せ、みづから轡づらを引向て、西の門より落行けり。

・真鶴（第四〇・四一回）

「……めづらかなり陶松寿、汝眞鶴と婚姻せし夜、只一たび見つるのみにて、夥の年を過したれば、王女もわが身も面忘れしに、年來恋し、と思ふ良人なればこそ、眞鶴ははや、足音にてもしりつらめ。……」

松寿は真鶴に向して、声をふり立、「怜悧はおはしませども、さすがは婦女子の見識なり。死するを孝とおぼすにや。賊臣を滅して、民を救ふは王者の孝也。再て討手の大勢を向られなば、いかにして脱れ給はん。いひがひなし。」と諫めつ賺しつ、夫婦かひ〳〵しく扶掖て、後門より落しまゐらせん、と議する……。

白縫は日来雄〻しきかひありて、鋲打たる鉢巻して、小具足に肚甲さしかため白柄の長刀をわきはさみて、紀平治が妻の八代以下、廿餘人の女使を、みな一般に打扮せ、……。

さる程に白縫は、八代等廿餘人の女使を將て、西の門より走り出るに……。

大床に挂られたる、花籃をとりおろして廉夫人に負し奉れば、眞鶴は殿内なる、先王廟の木獅子をうち被ぎて、王女を後方に隠し入れ、主従四人、祭祀のねり物に打扮て、巷口を投て狂ひ出づ。

寧王女は、眞鶴に扶掖れ、毬舞に打扮て主従木獅子をうち被ぎ、里の総角にまじらひつゝ、姑場嶽の北のかた、越来を投て落たまふ。

八代は、白縫を落さん爲、潜に引下りてふたゝび逐ひ來る敵を拒、三騎に痍負はせ、二騎を切倒し、首を取て立あがる……。

折しも、矢一ツ來りて八代が、吭のあたりへ丁と立ば、しばしもたまらず倒るゝを、軍兵四五騎下りたちて、首をとらんと競ひかゝる。

閃す桿棒を、劍を抜て切拂ひ、右に當り左に拄、縦横無碍に挑み戦ひ、三人に手を負し、二人を矢庭に斫伏たり。

眞鶴は、その身鉄石にあらざれは、肩を打し腕を折れ、終に多勢に當りがたく、株に跌き、礮と碾べは、衆皆得たり、と棒とり直し、乱打に打程に、憐むべし真鶴は、肉破れ骨碎け、今宵ぞ死出の山蔭を、越来の露と消にける。

頼なるかな眞鶴は、王女とおなじ年に生れて、廉夫人の妹なれば、面影もよく肖たり。今真鶴が首をもて、寧王女のおん身がはりとし、利勇を欺き得たらん……。

吭より項まで、筥中過て射徹され、血に塗れつゝ手にもてる、太刀の刃はみな虧れて、鋸に異ならねば……。

紀平治は、松の枯枝を伐おとし、死骸の上に積かけて、焦火をさしつけつ、「南無」と念ずる声とともに……。

絆切てもなほ放さゞる、眞鶴が劍

（松寿は）眞鶴が首を斫はなちて、錦の半臂に押裹み、屍は川へ衝流して、形のごとく水葬し……。